

贈る言葉

山梨県立大学長 伊藤 洋

今日、ここに横内正明山梨県知事代理古賀浩史^{ひろし}山梨県総務部長をはじめ山梨県内各界のご来賓のみなさまにご列席を賜り、山梨県立大学・国際政策学部卒業生 80 名、人間福祉学部卒業生 86 名、看護学部卒業生 100 名、さらに看護学研究科修士課程修了生 7 名のみなさんに、学位記を授与できることを心からうれしく思います。また、これらのみなさんを、今日まで支援してこられたご家族・ご親族の皆さん、また本学常勤の教職員は言うまでも無く、非常勤講師として、あるいは教育 GP に関わって協働事業に参加された多くの関係者、学外実習・インターンシップ・街づくりなどの現場でご指導を賜った数え切れないほど多くの県民のみなさんに心からお礼を申し上げたいと存じます。

本学では今日までの過去三年間、文部科学省所管事業のうち「大学等の教育取組の中から特に優れたものを選定し、重点的な財政支援を行うことにより、我が国全体としての高等教育の質保証、国際競争力の強化に資することを目的とする」と謳われて制定された「質の高い大学教育推進プログラム」、いわゆる「教育 GoodPractice」からの資金を受けて「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」を推進してまいりました。今日の卒業生のうち看護学部・人間福祉学部の学生諸君はこのプログラムのもとでさまざまな実践的学習や体験を経験して参りました。この学習成果は皆さんが現場に立たれたときに自信と勇気を鼓舞してくれるはずのものです。

本学は再び今年度「課題対応型サービスラーニングによる公立大学新教育モデル」が「教育 GP」として指定を受け、国際政策学部を中心にプロジェクトを 10 月より開始したところです。ここに、サービスラーニングとは、大学における座学と、地域現場でのフィールド活動を組み合わせた教授・学習・省察のための方法論のことです。つまり、「地域を活動拠点として行われる実践的な活動を、それだけに留まらず座学や省察と結びつけることによって、学習経験を豊かにすると同時に、市民としての責任を学習し、生涯にわたる地域社会への貢献を育み、地域の結びつきを強化するもの」と定義されているものです。これは着手したばかりで今日の卒業生にそのまま適用されてはきませんでした、みなさんはすでに先験的

にさまざまな活動を地域で行ってきました。そのすべてを紹介する時間はありませんが、ほんの一例として「山梨エコユースフォーラム」の環境啓発活動は、その活動の理論と実践が高く評価され、昨年年末に行われた第8回全国大学生環境活動コンテスト（略してエココン2010）では、並みいる参加51大学中の最優秀グランプリに輝き、環境大臣賞を授与されました。これなどは本学学生たちのサービ斯拉ーニング活動のほんの一例にすぎません。

この他にも、日本語教育、地域活性化、多言語放送、国際観光などの多様な活動において、カリキュラムと連動した独自の実践的学習の場を取り入れてきました。それにより、地域社会と大学との密接な関係を築き、地域から高い評価を得るとともに、学生の実践力の向上に大きく寄与すること実証されております。

これらの例は、学生諸君にとっては、いずれも社会や地域住民に対して奉仕する利他的な活動を通じて、最終的に学習成果として自己の利益につながる仕組みとなっているものであって、典型的なサービ斯拉ーニングの一部分です。

ところで、世紀の変わり目頃から日本社会にはなにやら冷たい隙間風が、どこからともなく吹き込んでくるようになりました。企業はこの時期、実に23四半期間という、過去に例のない長期にわたる好景気を享受し、この間に2.1倍の内部留保を貯めこんできました。それなのにその果実は株主や経営層には配分されたものの、企業にとって最も有力なステークホルダーであるべき社員に配分されなかったばかりか、起業はいわゆるリストラに励み、その結果中高年者を中心に職を失う人が急増するという結果にすなりました。かくていざなぎ景気をしのぐ長期の好況が終わるや、この国は350万人の失業者を常時抱える羽目になってしまいました。しかも、これらの人々の背中に向かって「自己責任」という厳しい言葉がはきつけられるという冷たささえもあったのです。

こういう世情は当然に生きずらさを招きます。自殺者3万人という不幸な事態がこの間継続し、いまだにその出口は見えていません。また、子供を産むことに逡巡する人々の増加は、合計特殊出生率1.37という低率にとどまったままです。この結果、人口が激減し、健康保険や年金・医療などあらゆる部面で社会問題を惹起しております。

こういう日本社会に流れる隙間風を防止するには、人々が利他的な行動に踏み出すことが極めて重要です。この国には、昔から「稼ぎが有って半人前、務めを果たして一人前」という言葉があります。「稼ぎ」とは自分の口を糊する活計（たつき）のことです。つまり、おまんまが食えるということは当たり前であってそれだけでは人間として半人前、「務めを果たす」つまり「利他的」な行為・他者のために何かができるようやく一人前の人間たりうるのだという意味です。

これについてすぐに思いつく鎌倉時代初期につくられた説話文学『宇治拾遺物語』の中にとっても面白い話がありますのでそれをここでは紹介しておきましょう。『宇治拾遺物語』第96話「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」です。この説話は小学校の教科書や絵本で紹介されていますので皆さんには馴染みの話です。その書き出しはこうです。

「今は昔、父母・主もなく、妻も子もなく、ただ一人ある青侍ありけり。すべき方もな

かりければ、「観音助け給へ」とて、長谷に参りて、御前にうつぶし伏して申しけるやう、「この世にかくてあるべきは、やがて、この御前にて干死ににしなん。もしまた、おのづからなる便りもあるべくは、そのよしの夢を見ざらんかぎりはお出づまじ」とて、うつぶし伏したりけるを、寺の僧見て、「こは、いかなる者の、かくては候ふぞ。物食ふ所も見えず、かくうつ伏したれば、寺のため、穢らひ出で来て、大事になりなん。誰を師にはしたるぞ。いづくにてか物は食ふ」など問ひければ、「かく便りなき者は、師もいかで侍らん。物食ぶる所もなく、あはれと申す人もなければ、仏の賜はん物を食べて、仏を師と頼み奉りて候ふなり」と答へれば、寺の僧ども集まりて、「このこと、いと不便のことなり。寺のために、あしかりなん。観音をかこち申す人にこそあんなれ。これ、集まりて養ひて候はせん」とて、かはるがはる物を食はせければ、持て来る物を食ひつつ、御前を立ち去らず候ひけるほどに、三七日になりけり。」

この書き出しは実に滑稽というか現代的というか、これが鎌倉初期のものとも思えませんね。つまりかいつまんで訳せば、主人公「青侍」ですが、彼は要するに親兄弟も妻子もないフーテンの若者、現代風に言えばニートと言ってよいでしょう。それが長谷寺にやってきて、観音さまの御前に座り込んでしまった。しかも食事を摂っている風も無いので餓死しそうだ。ここで死なれては困るので、寺の坊さんたちが、この男に「お前の指導者は誰か?」、「どこで飯を食うか?」と一生懸命尋ねます。すると、「自分には先生もいないし、食べる所とて無いし、また自分が死んだからとて困る人もいない、ただただ自分は仏様を師と仰ぎ、仏様が呉れるものを食べるだけだ」と答えたというのです。すると寺の僧たちは「これは困ったことだ、悪くすると観音様の信用にもかかわる、みんなで食事を与えてやらないとやばいぞ」ということになって、みんなで食事を上げることにしました。こうなると居心地が良くなってしまって、この男いつになっても立ち去らなくてついに三×七=21 日の間観音堂に住み付いてしまった、というのが書き出しです。

実はこの話、皆さんの良く知っている日本昔話「わらしべ長者」の童話に翻案されておりますので、この後の話は原文に当たらずともよいでしょう。

こうして21日間ごろごろしていた夜明けのこと、彼の夢枕にお告げがありました。「ここからすぐに立ち去りなさい。ここを出て何でもいいから手につかんだ物があつたらそれをしっかり掴んで持っておれ」と。そこで彼は寺を出ます。すると、さっそく「大門にけつまづきて」倒れました。起き上がって見れば手に一本の「わらすべ(げんぶんではわらすべと書いています)」を握っておりました。「いとほかなく思へども、仏の計らはせ給ふやうあらんと思ひて」これを持って歩いていきますと、アブが一匹飛んできました。あまりにうるさいのでこれを捕まえてこの「藁すべ」つまり「わらしべ」に縛り付けると、これがぶんぶんと飛び回ります。

そこへ女車といひますから、今でいえばロールスロイスかジャガーです、これに乗った稚児が「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれ乞ひてわれに賜べ」というので仕方なくこれを渡します。するとお礼にとつてみちのく紙に包んだ大柑子(おこうじ)、ミカンですね、こ

れを稚児の母親がくれました。

貰ったみかんを持ってまた歩いていくと、いかにも身分の高そうな女人が大勢の侍を具して歩いてくるのに出っくわします。この女性はすっかり疲労困憊していて、「喉の乾けば、水飲ませよ」というのですが辺りに水がありません。そこで「水の所は遠くて、汲みて参らば、程経候ひなん。これはいかが」とさっきもらったミカン三つを全部上げてしまいました。これで女主人の一命が取り留められたので一行は大いに喜んで、この男に布三匹をお礼に呉れました。

ある日、この布を背負ってまた歩いていくと「えもいはずよき馬に乗りたる人」とすれ違います。ところがどうしたことか、この馬が突然目の前で倒れると、そのまま死んでしまいました。死んでしまっただけではどうしようもありません、一行は下男を一人残して立ち去って行きました。件の青侍が下男にこの馬のことを聞くと陸奥から買ってきた名馬で大層高価な馬だがこうなってしまうたら皮を剥いで売る以外には何の値打もない、というのです。しからば、この布と交換してこの死んだ馬をくれというと、下男は馬の革よりこちらの方が高価なので喜んで死んだ馬をくれました。

ところが死んだと思った馬は死んではいませんでした。と言いますのは、男が長谷の方角に向かって「この馬生けて給はらん」と手を合わせますと、何と馬が生き返ってしまいました。

こうして、この名馬をひいて宇治の町まで来ますと、そこに長旅に出なければならないので大層馬を欲しがっているという男に出くわしました。この男は、すぐにこの馬に目を付けて、試乗させろと言います。男は、この馬に乗ってみますともうすっかり気に入ってしまいました。男は、自分には鳥羽に田んぼと家があるからこれをしばらくお前に預ける。「おのれ、もし命ありて帰り上りたらば、その時返へし得させ給へ。上らざらんかぎりは、かくてみ給へ。子も侍らねば、とかく申す人もよも侍らじ」と言って何処かへ行ってしまいました。

男は預かった田んぼを全部は耕せないで、この家の使用人たちに作らせて自分は耕作できるだけの田畑を耕作していましたところ、これが豊作。すっかりお金持ちになりました。

そしてついに「その家のあるじも、音せずなりければ、その家もわが物にして、子孫など出で来て、ことのほかに榮へたりけるとか」と、宇治拾遺物語第〇〇巻は大団円を迎えます。

この、藁しべ一本から大金持ちになった成功譚の鍵は、主人公の利他的行為です。彼が人の困難に自然にに応じていくだけで幸福を手に入れて、しかも登場人物の全てが良い方向に向かいました。

皆さんは、今日から社会人です。社会人として、それぞれの職場で「天職（ベルフーフ）」としてそれぞれの職業で口を糊していかれることでしょうか。しかし、「稼ぎが有って半人前、務めを果たして一人前」の格言をもってすれば、それはたった半人前のことにすぎません。「つとめ」とはこのくわらしべ長者が、観音様の命に従って行為をしたこと、すなわちかれの利他的行動を指して「つとめ」と言っているのです。

今日ここに卒業式を迎えた皆さんは山梨県立大学が自信を持って世に送り出す卒業生で

すが、それは過去の在学期間中に地域の中で薫しべを拾う活動を熱心にして来たことがあるからに他なりません。

ところで、今や中国やインド、また南米やインドシナ半島の国々の進出の著しい時代です。私も先日タイのナコン・ラチャシーマ・ラチャパット大学と本学との提携・交流についての調印のために行ってまいりました。このラチャパット大学には、本学第一期卒業生の山本真知子さんが、日本語学科の教員として勤務しています。また、今日の卒業生の中にいる●●さんが新たにスタッフとしてこの新学期から加わります。

それはそうと、ここで私が言いたいのは、他でもない、時代の変化のことです。この急激な変化は以後永遠に続くことでありましょう。こういう時代にあっては、大学院看護学研究科の修了生の皆さんを除けば、標準年齢で学部を卒業するというのは社会人としてその序の口に立ったというに過ぎません。学ぶべきことは山ほどあります。

大学は124単位で終わる処ではないこと、生涯かけて何百単位でも何千単位でも学ぶべきものです。皆さんが学び直し、または専門の拡大の必要性を痛感したらすぐに大学に戻って高等教育の追加をいたしましょう。その相談に、本学は積極的に応えていきますのでいつでも窓口を叩いてください。

ともあれ皆さんの健康を心から念じながら私の「贈る言葉」と致します。ご清聴ありがとうございました。(5,508文字)